「障害とは何か」という問いの吟味と再構築

――「事実」から「有用性」に基づいた障害定義の「戦略的・実践的使用」へ――

社会福祉学研究科　社会福祉学専攻　牧田　俊樹

1.全体要旨

「障害とは何か」という問いがある。さまざまな答えが予想される。しかし、どの答えが「正しい」のであろうか。もしくは、すべての答えが「正しい」のであろうか。これらの疑問に答えるには、「障害とは何か」という問いそのものの問い直しが必要である。そこで、本稿の目的は、まず、「障害とは何か」という問いの性質を明らかにすることにある。次に、その過程で導き出される「障害」という語の「使用」という考えをもとに、「障害という語をどのように使用すべきか」という問いに変換したうえで、その使用法を具体的に提示すること、また、提示したものの「有用性」を議論の俎上に載せることにある。本稿は，さまざまな分野の理論を、部分的に抜き取り、接合し、組み合わせる、言い換えると、コラージュやパッチワークのように、断片を集め、それらをつなぎ合わせるという方法を用いる。そのような方法を用いるのは、障害学、社会福祉学が学際的な研究を謳っており、それに重きを置くならば、さまざまな理論を接合することは当然のことと考えるからである。本稿の意義である。障害定義を論じることは、単純に理論的な問題とばかりは言えない。言語の世界で生きているわたしたちが、障害という言語について考え、そこから、障害という言語に何らかの形で働きかけることは、言語の世界の中で生じている障害に関する問題状況に直接働きかけることを意味する。そしてその働きかけが、複雑多岐にわたる障害に関する問題状況をいくらかでも改善し、障害者を取り巻く世界を多少なりとも障害者にとってよりよいものに変化させる可能性を有しているのならば、障害定義の考察は、実践的であり、かつ、理論的であり、そして意義のあることであろう。このような目的，方法，意義のもと、本稿は、以下のような結論を導き出した。まず、大前提として「障害とは何か」という問いは言語に関するものであり、「障害という言葉は何を意味するのか」という問いであること、つまり障害定義に関する問いであることが把握されなければならない。そのうえで、この問いは、客観的、中立的な立場から「真理」へ至るための問いなどではなく、己の依存する理論体系・信念体系によって多様な解が導き出される問いであることが明らかとなった。次に、問いの変換である。唯一の「正しい」解に行き着くことができないのならば、代わりに、「障害とは何か」という問いの結果、導き出された複数の解をどのように使用していくべきかを問うことが重要となる。同時に、障害とはこれであるというような新しい解を、それが多くの解の中の一つの解に過ぎないことを理解したうえで、どのように使用していくべきかを問うことが重要となる。そしてこれら複数の解の使用の基準は、「真偽」ではなく、事例ごとに異なる障害者にとっての「有用性」である。これらを踏まえ、第二部において「障害とは何か」という問いに対する複数の解の戦略的・実践的使用の「有用性」を具体的な形で議論の俎上に載せた。

2.目的と章構成

本稿の目的は、まず、「障害とは何か」という問いの性質を明らかにすることにある。次に、その過程で導き出される「障害」という語の「使用」という考えをもとに、「障害という語をどのように使用すべきか」という問いに変換したうえで、その使用法を具体的に提示すること、また、提示したものの「有用性」を議論の俎上に載せることにある。

各部及び各章の関連性であるが、まず、第一章で、クワインの全体論、ローティの真理に関する考察を用い、これまでなされてきた障害定義をめぐる争いが、「真理」の観点からなされているならば、無益であることを示唆する。第二章では、第一章で導き出された、唯一真なる障害定義はなく、障害定義は一つに定まらないという結論から、理論やモデルごとに異なる複数の障害定義を戦略的・実践的に使用するという考えを、予想される批判に答える形で展開し、議論の俎上に載せる。この第一章と第二章で、第一部を構成し、主に理論的考察として位置付ける。次いで第二部では、第一部の理論を、具体的な事例に沿って検討し、その「有用性」を確かめる。第二部は、第三章、第四章、第五章からなり、主に実践的な考察と位置付ける。第三章では、障害者の痛みに焦点を当てる。痛みと一口に言っても、障害者の痛みは多様である。したがって、それぞれの痛みには、それぞれに「有用」な障害の語り、障害定義が必要となるはずである。よって第三章では、障害者の多様な痛みに応じて、障害定義をいかに使い分けていくかを主に検討する。第四章では、知的障害に焦点を当てる。障害学、社会福祉学において、知的障害、知的障害者について語る言葉は、いまだ多くはない。どのような場面で、どのように知的障害、知的障害者、また知的障害者の痛みや、知的障害者の「わからなさ」について語ることが知的障害者にとって「有用」であるのか。知的障害に関するさまざまな状況とそれに適する知的障害定義、また知的障害の語りの検討をここでは主に行う。第五章では、障害者運動に焦点を当てる。アイデンティティポリティクス、アイデンティティやカテゴリーを拡散させるような運動、さらには運動から逸脱してしまった人たちの事例、どれもが異なった障害定義、障害の語り方を必要としていると考える。障害に関するさまざまな運動、そこから逸脱した、またそれに関与できなかった人たちの事例をみながら、どのように障害定義や障害の語りが使い分けられるべきかが議論の俎上に載せられる。

3.各章要約

第一章では、これまでなされてきた「障害とは何か」をめぐる争いが、「真理」の観点からなされているならば、無益であることを示唆するという目的のもと、まず、「障害とは何か」をめぐるポスト構造主義者と相互作用論者の対立を概観した。その後、クワインの「全体論」を用い、「障害とは何か」という問いに一義的に答えることはできないことを明らかにし、このような対立が生じる要因の一つは、「真理」への固執、その背景にある自らの理論体系・信念体系の「正しさ」に対する固執であることを、ローティの「真理」に対する論考から導き出した。結果、「障害とは何か」、正確には、「障害という言葉が意味するものは何か」という問いが、「真理」の観点から出されるならば、その問いをめぐる対立は無意味であることを明らかにした。

第二章では、第一章で示した、障害という語の意味が一義的に定まらないことを用い、「有用性」の観点からの障害定義の戦略的・実践的使用について考察することを目的とし

た。言い換えると、第二章の目的は、障害定義の戦略的・実践的使用を、予想される批判に答える形で、議論の俎上に載せることであった。結果、「障害とは何か」という問いに対する複数の解の戦略的・実践的使用、つまり複数の障害定義の戦略的・実践的使用という新しい概念の「有用性」を、具体的な形で議論の俎上に載せるという文字通りの意味で、目的は達成されたと考える。

第三章では、まず、障害者の痛みは、障害者に特有の痛みであるとすることが、障害者の痛みの軽減・解消という目的に照らして「有用」であると示すことを目的した。次に、障害者の痛みをどのような場面でどのように語ることが「有用」であるかを「実在」／構築の対立軸に沿って明らかにすることを目的とした。結果、まず、わたしたちが感じる痛みは、多様な社会的要因に左右されることから、障害者は独自のカテゴリーに押し込められ、他とは異なる社会的・文化的背景をもっているため、障害者特有の痛みがあると語ることが「有用」なのではないかと考えるに至った。次に、モリスの痛みの「連続体」という考えを導入し、急性の痛みと慢性の痛みはその両極に位置するものとし、一方の極の障害に起因する急性の痛みについては、「実在」すると語ることが「有用」であると考えた。また、連続体の極ではない痛みについては「実在」と構築の相互作用であると語るべきであるとした。さらに、連続体のもう一方の極、障害者の慢性の痛みについては、社会によって構築されると語ることが「有用」であると考えた。その後、障害者特有の慢性の痛みから、障害者の孤独について考察を展開し、障害者は、社会的処遇による孤独に加え、慢性の痛みによる孤独、絡み合う二重の深い孤独を抱えていることから、慢性の痛みを再び社会化し、孤独から回復するために、「社会的サポート」が必要であると結論付けた。最後に、これらの考察から、「障害とは痛みである」という障害定義の可能性を提示した。

第四章では、知的障害をどう定義し、知的障害者の「わからなさ」・痛みをどう語ることが彼ら／彼女らにとって「有用」であるかを示すことを目的とした。結果、不当な言説の内実を明らかにし、それを変えていく場合、「知的障害とは、社会的に構築されたものである」という定義が「有用」であると考えた。一方で、仮に、知的障害者が、物理的な痛みによって苦しんでいるならば、その緩和を目的として、「知的障害とは実在である」という定義を用いるのがよいと考えた。次に、知的障害者の「わからなさ」による痛みについてである。この痛みに対しては、構築主義の身体の軽視と、実在論の社会的なものの軽視の双方を補い、「わからない」ということがどういうことかを説明できるという点で、「知的障害とは、身体と世界の不調和である」という定義が「有用」なのではないかと考えるに至った。

第五章では、障害を「同一性」から語る障害のアイデンティティポリティクスは、どのような目的を達成するために「有用」であるかを,「青い芝の会」と *UPIAS* おける事例ともとに，明らかにすることを一つ目の目的とした。二つ目は、アイデンティティポリティクスの弊害を明らかにしたうえで、それを乗り越える運動を模索し、その際に、どのような障害定義を用いるのが「有用」かを示すことであった。三つ目は、アイデンティティポリティクスにも、新たな運動体にも馴染まない人たちにとって「有用」な障害定義を見つけることであった。最後は、上記の二つの運動体、および、運動体以前あり方の関係性を

明らかにすることであった。結果、まず、以下の 3 点を目的とする場合、障害のアイデンティティポリティクスは「有用」であるということを導き出した。①障害を有するがゆえの切迫した状況から身を守る場合。②障害者が自ら「主体性」を獲得する場合。③障害を個性・文化として保存する場合である。次いで、アイデンティティポリティクスの弊害を検討した。それは、少なくとも、6 点あった。①「本質化」、②「境界線の引き直しによる障害格差」、③「問題の背景への不覚」、④「われわれ内部の多様なアイデンティティのネグレクト」、⑤「われわれの規範からの逸脱」、⑥「われわれの境界のあり方をめぐる軋轢」である。このどれもが、「われわれ」と「かれら」の間に境界線を引くというアイデンティティポリティクスの性質上避けられないものであった。そこで、議論の俎上にのせたのが、アイデンティティを流動的なものととらえ、アイデンティティを拡散させ、アイデンティティやカテゴリーの社会構築性を暴露する運動であった。これは、「障害とは社会的に構築されたものである」という定義を用いることで可能となる運動であった。この運動体は、さまざまなアイデンティティの乗り換え、そしてそれをもとにした「緩いつながりによる複合的運動体」という新たな運動体へのヒントを与えるものであった。次いで、運動へ参加することをためらっている人たちにとっては、さしあたり運動に関わらない、もしくは、離脱するための「逃げ場」があった方がいいと考え、そのために「障害とは差異である」という定義から絶対的な平等に訴えることが「有用」であると考えるに至った。最後に、アイデンティティポリティクス、「緩いつながりによる複合的運動体」、運動体以前の「差異」、これらを状況や目的に合わせて乗り換え・移行するために、「切断」、「接続」という概念が「有用」であると考えた。

4.まとめ（結果・考察）

まず、大前提として「障害とは何か」という問いは言語に関するものであり、「障害という言葉は何を意味するのか」という問いであること、つまり障害定義に関する問いであることを把握する必要がある。そのうえで、この問いは、客観的、中立的な立場から「真理」へ至るための問いなどではなく、己の依存する理論体系・信念体系によって多様な解が導き出される問いであることを明らかにした。次に、問いの変換である。唯一の「正しい」解に行き着くことができないのならば、代わりに、「障害とは何か」という問いの結果、導き出された複数の解をどのように使用していくべきかを問うことが重要となる。同時に、障害とはこれであるというような新しい解を、それが多くの解の中の一つの解に過ぎないことを理解したうえで、どのように使用していくべきかを問うことが重要となる。そしてこれら複数の解の使用の基準は、「真偽」ではなく、事例ごとに異なる障害者にとっての「有用性」である。これらを踏まえ、第二部において「障害とは何か」という問いに対する複数の解の戦略的・実践的使用の「有用性」を具体的な形で議論の俎上に載せた。

本稿の先行研究における位置づけ、学術的な新しさであるが，まず、社会モデルと本稿は、次の二点で大きく異なる。一点目は、インペアメントとディスアビリティの二元論的な区別についてである。本稿は、状況と目的に合わせて「有用」であれば、社会モデルのように実在(インペアメント)と社会的構築(ディスアビリティ)を二元論的に使い分けもすれ

ば、社会的構築だけで一元論的に説明もする。さらに、異なる理論による定義をいくつか用い、多元論的に論じもする。この点で二元論的な区別を保持した社会モデルとは大きく異なる。本稿と社会モデルが異なる二点目である。それは社会モデルが「事実」のフェーズで議論をしていることである。社会モデルは社会的障壁を「事実」とみなし、それに起因するディスアビリティもまた「事実」とみなしている。しかし、本稿はあくまで「有用性」のフェーズで議論をしている。よって、社会モデルとは異なり、本稿は、障害を「事実」に即して定義することはない。それでは、社会モデル後のポスト構造主義および相互作用論とは何が違うのか。まず、相互作用論から説明する。社会モデルのインペアメント軽視を批判し、インペアメントの「事実性」に向かった相互作用論は、その根底に「事実」をおいている点で、本稿とは異なる。社会的構築との相互作用といっても、あくまで、根底の「事実」に束縛され、相互作用という「事実」をみている。したがって「有用性」のフェーズで議論をしている本稿とは異なる。次に、ポスト構造主義との相違点である。それは、ポスト構造主義が、「真理」に見切りをつけ、「事実」のフェーズで論じていない――この点では本稿と共通する――にもかかわらず、一つの語りである「実在論」の語りを頑なに拒否する点である。「実在論」も「事実」と対応しない一つの語りとして扱えば、それによる定義が「有用」な場面では、積極的に使用してよいはずである。この点で本稿とポスト構造主義は相違する。本稿は社会モデルとも、相互作用論とも、ポスト構造主義とも障害定義に対する考えを異にする。しかし、議論はそこで終わりではない。これらの障害定義の対立がなぜ生じるのかを、もしくは、そのような対立は無意味であることを示す第三の立場からの論考がすでに記されているである。そのどれもが、障害定義を一つに固定し対立することが無意味であることを示唆する。つまり、どの障害定義も唯一の「正しさ」を有するとは言えないのである。これをより積極的に言えば、すべての障害定義が「正しい」とも言える。これに対して、本稿は、どの障害定義も「正しい」とはせず、それは障害者にとっての「有用性」によって取捨選択にかけられるべきであると考える点で、上記の第三の立場からの論考とは異なる。あらゆる状況であらゆる障害定義を特権化することなく用いることは、障害者にとっての「有用性」の観点からは望ましいことではない。どの障害定義を用いるかは、状況と目的に依存して積極的に制約をかけられるべきなのである。社会モデル、その後のポスト構造主義、相互作用論、それらの対立の無化を図る第三の立場からの論考、そのいずれとも本稿は異なっており、新たな位置を占める。これらの論考との相違を踏まえたうえで、最後に榊原の障害定義に関する論考との相違を示す。榊原の障害定義の論考と本稿は、「事実」というフェーズでの議論ではない点、障害定義の非特権化へと向かわないという点、実践を視野に入れている点で、共通点をもつと考える。しかし、そのような共通点はあるものの、榊原の論考と本稿は、決定的に異なる点を有している。それは、榊原の論考が、あくまで多くの事例を網羅する一つの障害定義にこだわるのに対して、本稿は、ケースごとに異なる目的に沿って複数の障害定義を、戦略的・実践的に使用することを目指す点である。榊原の論考と本稿はこの点で相違する。このように本稿は、これまで障害定義を論じてきた多様な先行研究と様々な点で異なり、独自の位置を占め、学術的な新しさを有すると考える。

5.主な引用文献・参考文献

Abrams, T.（2016）Cartesian Dualism and Disabled Phenomenology, *Scandinavian Journal of Disability*, 18(2), 118-128.

Ahmed, S.（2004）*The Cultural Politics of Emotion*, Edinburgh University Press.

青木聡子（2020）「原子力施設をめぐる社会運動――ドイツにおける抗議行動と政策転換」長谷川公一編『社会運動の現在』有斐閣，94 - 117.

荒井裕樹（2017）『差別されてる自覚はあるか――横田弘と青い芝の会「行動綱領」』現代書館.

荒井裕樹（2020）『障害者差別を問い直す』ちくま新書.

Bendelow, G., A. and Williams, S., J.（1995）Transcending the Dualism : Towards a Sociology of Pain, *Sociology of Health & Illness*, 17(2), 139-165.

Best, S.（2007）The social construction of pain : an evaluation, *Disability & Society*, 22(2), 161-171.

Bhaskar, R.（1997）*A Realist Theory of Science*, Verso.（=2009，式部信訳『科学と実在論――超越論的実在論と経験主義批判』法政大学出版局.）

Bhaskar, R. and Danermark, B.（2006）Metatheory, Interdisciplinarity and Disability Research : A Critical Realist Perspective, *Scandinavian Journal of Disability Research*, 8(4), 278-297.

Bickenbach, J., E., Chatterji, S., Badley, E., M. and Üstün, T., B.（1999）Models of Disablement, Universalism and the International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps, *Social Science & Medicine*, 48, 1173-1187.

Borch, C.（2011）*Niklas Luhmann*, Routledge.（＝2014，庄司信訳『ニクラス・ルーマン入門――社会システム理論とは何か』新泉社.）

Bray, A（2003）*Definitions of Intellectual Disability : Review of the Literature Prepared for the National Advisory Committee on Health and Disability to Inform its Project on Services for Adults with an Intellectual Disability*, National Advisory Committee on Health and Disability.

Butler, J.（2006）*Gender Trouble : Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge.

Butler, J.（1990）*Gender Trouble : Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge.（＝2018，竹村和子訳『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.）

Butler, J.（2015）*Notes Toward a Performative Theory of Assembly*, Harvard University Press.（＝2018，佐藤嘉幸・清水知子訳『アセンブリ――行為遂行性・複数性・政治』青土社.）

Campbell, F., K.（2009a）*Contours of Ableism : The Production of Disability and Abledness*, Palgrave.

Campbell, F., K.（2009b）Disability Harms : Exploring Internalized Ableism, Marshall, C.,A., Kendall, E., Banks, M., E. and Gover, R., M.,S. eds. *Disabilities Insight from across Fields and around the World Volume1 The Experience : Definitions, Causes, and Consequences*, Praeger, 19-33.

Chappell, A., L.（1998）Still Out in the Cold : People with Learning Difficulties and the Social Model of Disability, Shakespeare, T. ed. *The Disability Reader : Social Science Perspectives*, Cassell, 211-220.

Chappell, A., L., Goodley, D., Lawthom, R.（2001）Making connections : the relevance of the social model of disability for people with learning difficulties, *British Journal of Learning Disabilities*, 29, 45-50.

千葉雅也（2013）『動きすぎてはいけない――ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』河出書房出版.

Danermark, B.（2001）*Interdisciplinary Research and Critical Realism : The Example of Disability Research*, (http://www.criticalrealism.com/archive/iacr_conference_2001/bdanermark_ircr.pdf, 2021.1.27).

Davis, L., J.（2002）*Bending Over Backwards : Disability, Dismodernism, and Other Difficult Positions*, New York University Press.

Delanda, M.（2006）*A New Philosophy of Society : Assemblage Theory and Social Complexity*, Bloomsbury Publishing Plc.（＝2015，篠原雅武訳『社会の新たな哲学――集合体、潜在性、創発』人文書院.）

Deleuze, G.（1968）*Différence et Répétition*, Presses Universitaires de France.（＝1992，財津理訳『差異と反復』河出書房新社.）

Deleuze, G. et Guattari, F.（1980b）*Mille Plateaux : Capitalisme et Schizophrénie*, Les Editions de Minuit.（＝2010，宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳『千のプラトー上――資本主義と分裂症』河出文庫.）

DPI 女性障害者ネットワーク編（2012）『障害のある女性の生活の困難――人生の中で出会う複合的な生きにくさとは――複合差別実態調査報告書』認定特定非営利法人 DPI(障害者インターナショナル)日本会議.

Feely, M.（2016）Disability Studies after the Ontological Turn : A Return to the Material World and Material Bodies without a Return to Essentialism, *Disability & Society*, 31(7), 863-883.

Fraser, N.（1995）From Redistribution to Recognition ? Dilemmas of Justice in a 'Post-Socialist' Age, *New Left Review*, 212, 68-923.

Freeman, J.（1979）Resource Mobilization and Strategy : A Model for Analyzing Social Movement Organization Actions, Zald, M., N. and McCarthy, J., D. eds. *The Dynamics of Social Movements : Resource Mobilization, Social Control, and Tactics*, Winthrop Publishers, Inc., 167-189.

Friedman, S. and Mottiar, S.（2004）*A Moral to the Tale : The Treatment Action Campaign and the Politics of HIV/AIDS*, University of Kwazulu-Natal.

Galvin,R.（2003）The Paradox of Disability Culture : The Need to Combine Versus the Imperative to let go, *Disability & Society*, 18(5), 675-690.

Goffman, E.,（1963）*Stigma : Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc.（＝1970，石黒毅訳『スティグマの社会学――烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.

五野井郁夫（2012）『「デモ」とは何か――変貌する直接民主主義』NHK 出版.

Goodley, D.（2001）'Learning Difficulties', the Social Model of Disability and Impairment : Challenging Epistemologies, *Disability & Society*, 16(2), 207-231.

Goodley, D.（2017）*Disability Studies : An Interdisciplinary Introduction 2ed*, Sage.

Goodley, D. and Rapley, M.（2002）Changing the Subject : Postmodernity and People with ‘Learning Difficulties’, Corker, M. and Shakespeare, T. eds. *Disability/Postmodernity : Embodying Disability Theory*, Continuum, 127-142.

Goodley, D. and Roets, G.（2008）The (be)coming and going of ‘developmental disability’ : the Cultural Politics of ‘impairment’, *Discourse : Studies in the Cultural Politics of Education*, 29(2), 239-255.

Gustavsson, A.（2004）The Role of Theory in Disability Research : Springboard or Strait-Jacket ? , *Scandinavian Journal of Disability Research*, 6(1), 55-70.

Hacker, P., M., S.（1972）*Insight and Illusion : Wittgenstein on Philosophy and the Metaphysics of Experience*, Oxford University Press.（＝1981，米澤克夫訳『洞察と幻想――ヴィトゲンシュタインの哲学観と経験の形而上学』八千代出版.）

浜田寿美夫（2016）「自閉症という現象に出会って『私たち』の不思議を思う――わかりあうことの奇跡とわかりあえないことの自然」エンパワメント・プランニング協会監修，浜田寿美夫・村瀬学・高岡健編『もういちど自閉症の世界に出会う――「支援と関係性」を考える』ミネルヴァ書房，95 - 142.

濱西英司（2016）『トゥレーヌ社会学と新しい社会運動理論』新泉社.

長谷川公一（2020）「社会運動の現在」長谷川公一編『社会運動の現在』有斐閣，1 - 26.

檜垣立哉（2009）『ドゥルーズ入門』ちくま新書.

檜垣立哉（2019）『ドゥルーズ解けない問いを生きる【増補新版】』ちくま学芸文庫.

平野啓一郎（2012）『私とは何か――「個人」から「分人」へ』講談社現代新書.

廣野俊輔（2009）「「青い芝の会」における知的障害者観の変容――もう一つの転換点として」『社会福祉学』50(3), 18-28.

星加良司（2007）『障害とは何か――ディスアビリティの社会理論に向けて』生活書院.

Hughes, B.（2007）Being Disabled : Towards a Critical Social Ontology for Disability Studies, *Disability & Society*, 22(7), 673-684.

古井正代（2001）「CP として生きるっておもしろい」全国自立生活センター協議会編『自立生活運動と障害文化』現代書館, 364-370.

角岡信彦（2010）『カニは横に歩く――自立障害者たちの半世紀』講談社.

笠井潔・野間易道（2016）『3.11 後の叛乱――反原連・しばき隊・SEALDs――』集英社.

加藤秀一（2001）「構築主義と身体の臨界」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房，159 - 188.

鬼界彰夫（2018）『ウィトゲンシュタイン『哲学探究』を読む 1　『哲学探究』とはいかなる書物か――理想と哲学』勁草書房.

金　満里（1996）『生きることのはじまり』筑摩書房.

小林昌之編（2017）『アジア諸国の女性障害者と複合差別――人権確立の観点から』IDE-JETRO アジア経済研究所.

小林敏昭（2007）「一人歩きする「健全者手足論」――青い芝運動における障害者と健全者の関係をめぐって」『そよ風のように街に出よう』74，52 - 57.

國分功一郎（2013）『ドゥルーズの哲学原理』岩波現代全書.

Kolářová, K.（2010）Performing the Pain: Opening the (Crip) Body for (Queer) Pleasures, *Review of Disability Studies*, 6 (3), 44-52.

小山正義編（1989)『あゆみ――創立 30 周年記念号(上)』「青い芝の会」県連合会.

熊谷信一郎・大澤真幸（2011)「痛みの記憶／記憶の痛み――痛みでつながるとはどういうことか」『現代思想』39(11)，38 - 55.

熊谷晋一郎（2013)「痛みから始める当事者研究」石原孝二編『シリーズケアをひらく　当事者研究の研究』医学書院，217-270.

黒田　亘（1975)『経験と言語』東京大学出版会.

Leder, D.（1990) *The Absent Body*, The Universal of Chicago Press.

Liggett, H.（1988) Stars are not Born : An Interpretive Approach to the Politics of Disability, Disability, *Handicap & Society*, 3(3), 263-275.

Luhmann, N.（1981) *Politishce Theorie im Wohlfahrtsstaat*, Günter Olzog Verlag GmbH.（＝2007, 徳安彰訳『福祉国家における政治理論』勁草書房.）

Luhmann, N.（1984) *Soziale Systeme : Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag.（＝1993a，佐藤勉監訳『社会システム理論』（上）恒星社厚生閣.）

Luhmann, N.（1984) *Soziale Systeme : Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag.（＝1993b，佐藤勉監訳『社会システム理論』（下）恒星社厚生閣.）

Luhmann, N.（1997) Globalization or World Society : How to Conceive of Modern Society ? , *International Review of Sociology*, 7(1), 67-79.

Mallet, R. and Runswick-Cole, K.（2014) *Approaching Disability : Critical Issues and Perspectives*, Routledge.

丸山　仁（2004)「社会運動から政党へ？――ドイツ緑の党の成果とジレンマ」大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編『社会運動の社会学』有斐閣選書, 197-212.

McDonald, K.（2004) Oneself as Another : From Social Movement to Experience Movement, *Current Sociology*, 52(4), 575-594.

McRuer, R.（2006) *Crip Theory : Cultural Signs of Queerness and Disability*, New York University Press.

Michailakis, D.（2003) The Systems Theory Concept of Disability : One is not Born a Disabled Person, One is Observed to be one, *Disability & Society*, 18(2), 209-229.

Misak, C.（2013) *The American Pragmatists*, Oxford University Press.（＝2019a，加藤隆文訳『現代プラグマティズム叢書第 1 巻　プラグマティズムの歩き方　上巻』勁草書房.）

Misak, C.（2013) *The American Pragmatists*, Oxford University Press.（＝2019b，加藤隆文訳『現代プラグマティズム叢書第 2 巻　プラグマティズムの歩き方　下巻』勁草書房.）

三井さよ（2011)「「知的障害」を関係で捉えかえす――痛みやしんどさの押しつけを回避するために」『現代思想』39(11)，38 - 55.

森修生活史編集委員会（1990)『私は、こうして生きてきた――森修生活史』陽光出版.

Morris, D., B.（1993) *The Culture of Pain*. The Regents of the University of California.（＝1998，渡邊勉・鈴木牧彦訳『痛みの文化史』紀伊國屋書店.）

永井　均（1995)『ウィトゲンシュタイン入門』ちくま新書.

中西正司・上野千鶴子（2003)『当事者主権』岩波新書.

Newton, E.（1972）*Mother Camp : Female Impersonators in America*, The University of Chicago Press.

野家啓一（1998)『現代思想の冒険者たち２４　クーン――パラダイム』講談社.

野家啓一（2006)「対話」大庭健・井上達夫・加藤尚武・川本隆史・神崎繁・塩野谷祐一・成田和信編『現代倫理学事典』弘文堂，571－572.

野口裕二（2001)「臨床のナラティブ」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房，43 - 62.

野矢茂樹（2006)『入門！論理学』中公新書.

野矢茂樹（2010)「解説『青色本の使い方』」Wittgenstein, L.（1958）*The Blue and Brown Books*, Basil Blackwell.（＝2010，大森荘蔵訳『青色本』ちくま学芸文庫.），171 - 207.

Oliver, M.（1990）*The Politics of Disablement*, Macmillan Publishers Ltd.

大谷　弘（2020)『ウィトゲンシュタイン　明確化の哲学』青土社.

Paterson, K. and Hughes, B.（1999）Disability Study and Phenomenology : The Carnal Politics of Everyday life, *Disability & Society*, 14(5), 597-610.

Quine, W., V., O.（1953）*From a Logical Point of View : 9 Logico-Philosophical Essays Second Edition, Revised*, Harvard University Press.

Rapley, M.（2004）*The Social Construction of Intellectual Disability*, Cambridge University Press.

立命館生存学研究所（2020)「和歌山県立身体障害者福祉センターに対する青い芝の会の抗議行動」（http://www.arsvi.com/d/i051976w.htm, 2021.1. 22）.

Rorty, R.（1979）*Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press.（＝1993，野家啓一監訳，伊藤春樹・須藤訓任・野家伸也・柴田正良訳『哲学と自然の鏡』産業図書.）

Rorty, R.（1987）Science as Solidarity, Nelson, J., S., Megill, A., McCloskey, D., N. eds. *The Rhetoric of the Human Sciences : Language and Argument in Scholarship and Public Affairs*, The university of Wisconsin Press, 38-52.（＝1988，冨田恭彦訳「連帯としての科学」『連帯と自由の哲学――二元論の幻想を超えて』岩波書店，1-32.）

Sacks, O.（1988）The Revolution of the Deaf, *The New York Review of Books*, 35(9), 23-28.

定藤邦子（2011)『関西障害者運動の現代史――大阪青い芝の会を中心に』生活書院.

榊原賢二郎（2016)『社会的包摂と身体――障害者差別禁止法制後の障害定義と異別処遇を巡って』生活書院.

榊原賢二郎（2018)「リプライ　『社会的包摂と身体』の論理――立岩真也氏の書評への応答」『障害学研究』14，308 - 320.

Schütz, A. and Luckmann, T.（2003）*Strukturen der Lebenswelt*, UVK Verlagsgesellschaft mbH.（＝2015，那須壽監訳『生活世界の構造』ちくま学芸文庫.）

Searle, J., R.（2010）*Making the Social World : The structure of Human Civilization*, Oxford University Press.（＝2018，三谷武司訳『社会的世界の制作――人間文明の構造』勁草書房.）

千田有紀（2001)「構築主義の系譜学」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房，1 - 42.

瀬山紀子（2014)「障害女性の複合差別の課題化はどこまで進んだか――障害者権利条約批准にむけた障害者基本法改正の議論を中心に」『国際女性』28，11-21.

社会福祉事業団体日本脳性マヒ者協会全国青い芝の会総連合会編（1978)『青い芝 No.104』.

Shakespeare, T.（2002）The Social Model of Disability : An Outdated Ideology ? , *Research in Social Science and Disability*, 2, 9-28.

Shakespeare, T.（2014）*Disability Rights and Wrongs Revisited Second Edition*, Routledge.

Sherry, M.（2016）A Sociology of Impairment, *Disability & Studies*, 31(6), 729-744.

障害者問題資料センターリボン社編（1977）『障害者からの証言 No.4　自立のあしおと――野中忠夫氏追悼特集』障害者問題資料センターリボン社.

Siebers, T.（2008）*Disability Theory*, The University of Michigan Press.

Stegmüller, W.（1975）*Hauptströmungen der Gegenwartsphilosophie*, Alfred Kröner Verlag Stuttgart.（＝1981，中埜肇・竹尾治一郎監修，竹尾治一郎・森匡史・藪木栄夫訳，『現代哲学の主潮流２』法政大学出版局.）

Stegmüller, W.（1978）*Hauptströmungen der Gegenwartsphilosophie : Eine Kritische Einführung Band I* , Alfred Kröner Verlag Stuttgart.

TAC（2020）*Our History-Timeline*, (https://www.tac.org.za/our-history/, 2021.1.6).

田中耕一（2006)「構築主義論争の帰結――記述主義の呪縛を解くために」平秀美・中河伸俊編『新版　構築主義の社会学――実在論争を超えて』世界思想社，214－238.

田中耕一郎（2005)『障害者運動と価値形成――日英の比較から』現代書館.

田中耕一郎（2008)「社会モデルは〈知的障害〉を包摂し得たか」『障害学研究』3，34 - 62.

田中耕一郎（2017)『英国「隔離に反対する身体障害者連盟（UPIAS)」の軌跡――〈障害〉の社会モデルをめぐる「起源の物語」』現代書館.

田中耕一郎（2018)「障害学は知的障害とどのように向き合えるのか――他者化への抗いのために」『障害学研究』14，105 - 119.

丹治信春（1996)『言語と認識のダイナミズム――ウィトゲンシュタインからクワインへ』勁草書房.

丹治信春（2009)『クワイン―ホーリズムの哲学』平凡社.

立岩真也（2018)「書評　『社会的包摂と身体――障害者差別禁止法制後の障害定義と異別処遇を巡って』」『障害学研究』14，296 - 307.

辰巳一輝（2021)「2000 年代以後の障害学における理論的転回／転回：「言葉」と「物」、あるいは「理論」と「実践」の狭間で」『共生学ジャーナル』5，22－48.

Thomson, R., G.（2017）*Extraordinary Bodies : Figuring Physical Disability in American Culture and Literature Twentieth Anniversary Edition*, Columbia University Press.

Thomson, R., G.（2002）Integrating Disability, Transforming Feminist Theory, *NWSA*, 14(3), 1-32.

Timpanaro, S.（1975）*On Materialism*, NLB.

富永京子（2017)『社会運動と若者―日常と出来事を往還する政治』ナカニシヤ出版.

冨田恭彦（1994)『クワインと現代アメリカ哲学』世界思想社.

冨田恭彦（2016)『ローティ――連帯と自己超克の思想』筑摩書房.

Tremain, S.（2001）On the Government of Disability, *Social Theory and Practice*, 27(4), 617-636.

Trent, JR., J., W.（1995）*Inventing the Feeble Mind : A History of Mental Retardation in the United States*, University of California Press.

上田紀行（2010)『スリランカの悪魔祓い――イメージと癒しのコスモロジー』講談社.

上野千鶴子（1996）「複合差別論」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『差別と共生の社会学』岩波書店，203 - 232.

上野千鶴子（2001）「はじめに」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房， i - iv.

宇野邦一（2020）『ドゥルーズ流動の哲学　増補改訂』講談社学術文庫.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1973a）*Internal Circular*, 2, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1973b）*Internal Circular*, 3, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1973 or 1974）*Internal Circular*, 6, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1974a）*Internal Circular*, 7, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1974b）*Internal Circular*, 10, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1974c）*Internal Circular*, 12, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1974d）*Policy Statement*, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1978）*Internal Circular*, 24, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1980）*Internal Circular*, 35, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1981）*Internal Circular*, 47, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1982a）*Internal Circular*, 49, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1982b）*Internal Circular*, 50, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1986）*New Circular*, 3, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation（1987）*New Circular*, 4, UPIAS London.

Union of the Physically Impaired Against Segregation and Disability Alliance（1997）*Fundamental Principles of Disability*, UPAIS & DA London.

Vehmas, S.（2010）The Who or What of Steve : Severe Intellectual Impairment and its Implications, Häyry, M., Takala, T., Herissone-Kelly, P. and Árnason, G., eds. *Arguments and Analysis in Bioethics*, *Rodopi*, 263-280.

Vehmas, S.（2012）What Can Philosophy Tell Us about Disability, Watson, N., Roulston, A. and Thomas, C. eds. *Routledge Handbook of Disability Studies*, Routledge, 298-309.

Vehmas, S. and Mäkelä, P.（2009）The ontology of Disability and Impairment : A Discussion of the Natural and Social Features, Kristiansen, K., Vemas, S. and Shakespeare, T. Eds. *Arguing about Disability : Philosophical Perspectives*, Routledge, 42-56.

Vernon, A.（1999）The Dialectics of Multiple Identities and the Disabled People's Movement, *Disability & Studies*, 14(3), 385-398.

Watson, N.（2002）Well, I Know This Is Going to Sound Very Strange to You, But I Don't See Myself as a Disabled Person : Identity and Disability, *Disability & Studies*, 17(5), 509-527.

Watson, N.（2012）Researching Disablement, Watson, N., Roulston, A. and Thomas, C. eds. *Routledge Handbook of Disability Studies*, Routledge, 93-105.

Wendell, S.（1996）*The Rejected Body : Feminist Philosophical Reflection on Disability*, Routledge.

Wittgenstein, L.（1953）*Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell.（＝1997，黒崎宏訳『『哲学的探究』読解』産業図書.）

Wittgenstein, L.（1969）*Preliminary Studies for the "Philosophical Investigation Generally Known as The Blue and Brown Books*, Basil Blackwell.
山下幸子（2008）『「健常」であることを見つめる――一九七〇年代障害当事者／健全者運動から』生活書院.
Yates, S., Dyson, S. and Hiles D.（2008）Beyond Normalization and Impairment : Theorizing Subjectivity in Learning Difficulties-Theory and Practice, *Disability & Society*, 23(3), 247-258.
横田　弘（2015）『障害者殺しの思想【増補新装版】』現代書館.
横田弘・立岩真也・臼井正樹（2016）『われらは愛と正義を否定する』生活書院.
横塚晃一（2007）『母よ！殺すな』生活書院.
Young, I., M.（1990）*Justice and the Politics of Difference*, Princeton University Press.（＝2020, 飯田文雄・苅田真司・田村哲樹監訳, 河村真美・山田祥子訳『正義と差異の政治』法政大学出版局.）
油田優衣（2019）「強迫的・排他的な理想としての〈強い障害者像〉――介助者との関係における「私」の体験から」『臨床心理学――当事者研究をはじめよう』増刊 11, 27-40.